

課題 「地の文をつくろう くもどりたくない」

作者… ペンネーム Nix490 (中一)

(これまでのあらすじ)

場所はある田舎の廃寺。昼休みになんとなくふらっと学校を出たぼくはいつもいやな事があった時のにげ場になっている廃寺にきた。しばらくそこでぼーっとしていて、きづけばもう六時間目の途中の時間になっていた。

いつ、帰ろう。ため息をつきながら、ぼくはゴロっと横になる。憂鬱な気持ちになりながら、ふとこの間読んだマンガを思い出す。それはぼくの好きなマンガで、その物語にオリジナルキャラクターを入れて想像するのが大好きなしゅくだ。そのもう想を始めてニヒヤニヒヤと変な顔をして進めていくうち、いつの間にか数時間がたっていたようだ。ハッと気づけばあたりはうす暗く、時刻はただ今六時半。ぼくの頬をたらっと一筋汗がつたう。やっべえ……完全に帰るタイミングを失った。一晩ここに野宿するかあ？ 色々策を考えながら胡坐あぐらをかいて頬杖をつく。なんとなく庭に視線を向け、そして見た。暗闇にまぎれた幽霊らしき人影を……。微妙な間が空いた。たいてい悲鳴をあげるシーンなんだろうけど、ぼくはSFが好きで、一度幽霊にも会ってみたいと思っていた。幽霊に会ったら、最初にすることはただ一つ！相手に足があるか確認すること！ぼくは幽霊の足元に目をやる。……しっかりと靴をはいた足があった。なんなんだよ！幽霊に会えたと思ったのに！ふてくされて、「幽霊」に背を向けて横になる。やがて、ため息とともに聞こえてきたのは、兄の声だった。

「こんなところにいたのか。さあ、もどろう」

ぼくの耳がびくっと動く。よっしゃあ、帰るタイミング、来た！でも、近い未来のこと（帰宅したくらいのこと）を考えると、帰りづらい。絶対、どうして学校の途中でぬけ出したのか聞かれる。

「……」

だまってたら、どうなるかな。ぼくは一応身を起こし、胡坐をかく。

「どうしたんだ。早くもどらないと。みんな心配してる」

へーえ、心配してるんだ。じゃあ、なんでぼくのランドセルと自分のカバンを持っていくんだ？家に帰る途中で電話をもらって、ここに直行したんだろう。考えていたら何故かいらっとした。何でだろう？

「もどりたくない」

ふてくされた声でいうと、お腹がすいているであろう兄も声をいらだたせた。

「どうして？」

いえるもんか、理由がないなんて。絶対怒鳴られるぞ。

「……」

だんまりで通そうとしたが、思わずニヤッと笑ってしまった。やっぱりお腹すいてんだろうなあ。先刻から兄の腹の虫が鳴いている。そういえば、ぼくもお腹がすいているんだ。なんだか、「グー」の音が増えている気がする。

「だまっていたらわからないじゃないか。さあ、立って。早く」

襟首をつかまれ、ぐいと引っ張られる。……抵抗があせみちできない。夜の睦道を二

人並び歩くのは気が楽になった。ぼくは星空を仰ぎ見る。それがとぎれたのは、兄にいきなり顔面にランドセルを投げつけられたときだけだった。